

二〇二三年度B

国語 (60分)

〈注意〉

- (一) 開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- (二) 問題は1ページから33ページに印刷されています。
- (三) 受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入しなさい。
- (四) 解答はすべて解答用紙の定められたところに記入しなさい。

受 験 番 号			

I

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

あ、と思った時には遅かった。世界の上下が逆転し、地球が裏返しになる感じだった。アツデのコーヒーカップがテーブルの端で弾んでからフローリングの床に転がった。その前に濃い茶色の液体は宙に拡がって食卓に降り、重也のズボンの前にかかった。コール天の布地は直ちに熱さを肌に伝えはしなかったが、ズボン下を通して尿を洩らした時のような濡れた温かさを腿の辺りに生み出した。

「どうしたの。早くズボンをお脱ぎなさい」

思わず立ち上がった重也に幾子の声が飛んだ。

「指が滑った。ズボンも焦茶だから染みにはならんよ」

ベルトをユルめて覗き込む目にズボン下の白さが映った。その上に二、三箇所、茶色のぼやけた形が浮き出している。

「この前から二度目でしょう。少しおかしいわよ」

ヒナンする声の終りの方が妙に暗く翳っているのに重也は苛立った。

「ただ指が滑っただけだ。重いカップにコーヒーを注ぎ過ぎた」

幾子の差し出す濡れた膳フキンで形だけズボンの前を拭いた重也はまた食卓につこうとした。

「穿き替えていらっしやい。代りのズボンがあるでしょ」

① 有無をいわせぬ妻の言葉に彼は洪々寝室に足を向けた。ダイニングとは違う A 沈んだ冷たい空気が、食卓での失敗の

瞬間をどこから眺めるように甦らせた。指から丸みのあるカップの取手が滑り抜けた時、次にはとんでもないことの起るのがはっきりわかった。それは恐れでも後悔でも驚きでもなく、② ひと繋りの世界の切れ目との出会いだった。突然時が停止し、そこから何

か巨大なもののゆっくり動き出そうとする気配が伝わった。こんなふうにして道路で車にぶつかり、プラットフォームから線路に落ち、道の窪みに躓いて足の骨を折ったりするのだろう、という予感が B 身に迫った。どの際にも、その一瞬前には地球がめくり返されるらしかった。それで終りになるのだ、と考えながら重也は寒い部屋で C ウールのズボンに穿き替えた。足許に蹲るコールドのズボンを見下すと、コーヒーをぶちまけた自分が何かを諦めたかのようにそこにしゃがみ込んでいるのが感じられた。

「これは、どうするんだ」

脱いだズボンを手に提げたまま、重也はつとめて平静な声で廊下から幾子に訊ねた。

「うちで洗ってもいいけれど、^e ツヤがなくなるからクリーニングに出しますよ」

意外に穏やかな声に拍子抜けした重也は廊下の隅にズボンを落して食卓に坐り直した。零れたコーヒーは綺麗に拭い去られ、食器の位置も変ってテーブルは何事もなかったかのように整えられている。ただ長年使っていた大振りのモーニングカップだけは見当らない。

「あれは割れたかね」

カップの落ちた床の辺りをさりげなく目で探りながら彼は幾子に確かめた。

「一度、ちゃんと調べた方がいいと思うんですよ」

肩でひとつ息をついた幾子の言葉に重也は ^③ たじろいだ。

「何を調べるんだ」

「だから、脳のCTを撮ってもらうんですよ」

「血管が詰まっている？」

「そうでなければいいですけど、このところ貴方おかしいでしょ」

「年のせいで動きが少し鈍くはなつたろうが、血管や神経がどうこういうほどのことはない」

「いいえ。自分で気がつかないだけで、^④変ですよ」

「健全な老化だと思うがね」

「昨夜、寝る前に戸締りを見てくれたのでしょうか？」

「全部確かめた」

「玄関の鍵が閉めてなかった」

え、と声をあげたまま重也は息を飲んだ。最後に戸締りを確かめるのは彼の習慣である筈だが、昨夜の玄関で自分がどんなことをしたかの記憶がない。急に不安を覚えて彼はセーターの裾をぐいと引いた。首が締めつけられ呼吸の詰まる感じがしたからだ。

それから^⑤立て続けに幾子の指摘が始まった。散歩の折に頼んだ買物の何が抜けていたか。ポストに投函^{とうかん}すると受け合った葉書がコートのポケットによれよれの形ではいつていた。洗濯機に入れたシャツからはクリーニングの伝票が紙の塊として出て来たし、公衆電話のボックスに置き忘れた手帳は親切なおじいさんが電話で知らせてくれた……。

覚えていることより、心当たりもないことの方が多かった。その都度幾子がそれらの失敗に文句を言わず、何かを待つかのごとく息をひそめていたらしいことの方が気味悪かった。身体が熱くなり、咽喉^{のど}の窮屈な感じが高まった。

「だから脳が詰まっているのか」

重也は無意識のうちに椅子を立っていた。

「そうでなければいいけど、心配しているのよ」

「どこもかも詰まっているのかもしれないな」

吐き捨てるように言つて彼はテーブルを離れた。食事が終わったのか、まだ途中であつたのかもはっきりしなくなつていた。その場を逃れる如く寝室にはいると^{むし}筆^{むし}取る勢いで着ているものを脱ぎ捨てた。半袖の肌着一枚になった時、V形の胸の剝^むりが背にまわり、

ラベルのついた後ろ側が咽喉仏の下を締めているのを発見した。前後を間違えて着た肌着が食卓の失策の遠因であつたに違いない、と思った重也は慌てて肌着を脱ぐと生温かなそれを被り直した。室内の寒気の身を包むのが感じられ、彼は大きく肩を震わせた。

居間に電話の鳴る音が聞えた。幾子の長話が始まるのかとの予想に反し、短い応対の後に重也を呼ぶ声が届いた。残りの衣服を慌てて身に着けた彼は、一度首を廻まわして肌着の襟が具合よく納まっているのを確かめてから、^⑥鷹揚おうように居間に踏み込んだ。

重ちゃん、と受話器の奥から馴なれ馴なれしい口調で呼びかけて来たのは小学校の同級生である輪島わじまの高い声だった。世話役の大浜おおはまが急に入院してしまったので自分が代りを押しつけられたが、今日、大丈夫だろうね、と問いかける言葉に重也は驚いた。

「今日？ 来週の金曜日ではなかった？」

「すっかりしてよ。九日の金曜日。今日ですよ」

「次の週だとばかり思ってた」

身体の芯からすつと金曜日の中身の抜け落ちていくような心許こころもとなさを覚えた。

「やっぱり電話してよかった。重ちゃんまでそうなんなのな」

「勘違いしていた。ごめん。でも大丈夫、行きますよ」

「去年と同じ新宿の店ね。十五人位あつまは集るから」

「大浜君はどうしたの？」

「倒れたりしたわけではないらしいけど、急いで何かの検査をしなければならなくなって。重ちゃんも気をつけてよ」

仇名あだなで呼び合つた記憶はあつても、名前をちゃんづけで口にした覚えのない重也には輪島のわざとらしい親しげな口調が疎ましかった。

電話を切つて振り向くと、ソファアの端に幾子が膝ひざを揃そろえて坐っている。

「一週間、間違えていた」

間の悪さを噛み締めるようにして彼は呟いた。幾子はガラス戸から外に目をやったまま何も応えない。

「来週だとばかり思っていた。でも一時に新宿だから、昼頃に出れば間に合うよ。電話をもらってたすかった」

壁の時計をちらと見上げ、出かけるまでのゆとりある時間を彼は味わうかのように頭の中にゆっくり遊ばせた。幾子が椅子の上で身動ぎしようだった。

「今日は二時から歯医者さんではなかった？」

不意に足許を掬われた。日付と曜日が目紛しく駆け廻って重也を混乱に突き落した。

「金曜日……あれは今週の金曜日だったか？」

狼狽えてサイドボードの引き出しから取り出した診察券の裏面に記入されている予約日は間違いなく今日の日付だった。どこで記憶が狂ったかわからなかったが、カレンダーの数字が勝手に動き出して共食いを始めたかのようにだった。

⑦　こういう日があるんだ、と重也は他人事めいた感じで自分の窮状を眺めやった。厄日とか暗剣殺とか、二度あることは、といった言葉が遠い空を火花を散らして飛び交った。

「困ったわね」

⑧　いつになく慰める響きの声が妻から寄せられるのに触れると俄かに重也は反撥を覚えた。

「困りはしないさ。予約をキャンセルして別の日をとればいい」

「歯医者さんより小学校の同窓会を優先するんですね」

「輪島君に行くと言ったばかりだもの。今特に痛んでいる歯があるわけでもなし」

気がついていたらあの時そばから言ってくればよかったものを、と不満が湧くのを重也は押し殺した。幾子が黙ってこちらの過ちを見守っていたのかもしれない、という疑いが頭を掠めたからだだった。

歯科医院に電話して今日の予約を取り消すと、三週間先の午後に来るように告げられた。来週にでも行けばいいかと気軽に考えて

いた重也は治療の間のあくことに不安を覚えたが、幾子には黙っていた。知られば、今度は逆に直ちに文句を言われそうな恐れがあった。齒の治療を犠牲にしたために、輪島に念を押された集りが逃すことの出来ぬ貴重な機会として俄かに重みを増すようだった。

そんな気分が出かける重也に珍しくネクタイを締めさせた。スーツを着ることまでは考えなかったが、*オープンシャツの襟元に*アスコットタイを巻くような気楽な身形を遠ざけた。前々回のレストランで大浜の手助けをして世話を焼いていた、遂に姓の変ることのなかった星塚のツヤのある銀髪と、濃紺の丈長いワンピース姿が頭の奥に見え隠れしてもいた。

下駄箱から取り出した黒い靴はまだ新しさを失ってはいなかったが、適度に履き馴らされて快く足を迎え入れた。

「良かったよな、この靴は」

玄関でコートの襟を立てながら、妻の反応を窺うように重也は軽く足踏みしてみせた。

「それだって、買うまでがあれやこれや言って大変だったくせに」

「大変だった結果、良い靴に出会えたのだから満足しているよ」

「歩くのは靴ではなくて足ですよ。躓いたり、転んだりしないように気をつけなくては」

「大丈夫、靴が良いから」

重也はもう一度足踏みを繰り返してからドアのノブに手をかけた。

「朝から今日は少しおかしかったの、気がついてるんですか」

幾子の声が改まったようだった。

「同じだよ、いつもと」

⑨ 妻の言葉をやり過ぎすようにして彼はドアを押した。

「本当に頭の検査をしましょうよ。私が病院の手配はするから」

背にかかる幾子の声が日頃と違って湿っているように感じられた。わかった、と大きく頷いて重也は玄関を出た。相手の言葉を受

け入れたというのではなく、とりあえず声を返したつもりだった。信号のない所を走って渡ったりしないですよ、という忠告が閉りかけたドアの隙間から尚も追って来る。振り向かず片手を上げて彼は道に踏み出した。背後にドアの鍵をかけるひっそりした音が起ったようだった。それが家の溜息のよう^{ためいき}に耳に届いた。

重也が新宿の店については定刻少し前だった。表通りから少しは違ったビルの三階にある和食の店の個室には、既に十人ほどの仲間が集っていた。中腰で会費を集めていた輪島が重也を見ると手招きして自分の横を指差した。畳に敷かれた座布団に尻をつける^{おぼ}と重也は室内を見廻した。例年顔を揃える男達^{たち}はほぼ見覚えがあつたが、数人いる女性達は名前もわからぬ者の方が多かった。星塚の姿は見えなかった。

形どおりの乾杯と、老人ホームで暮す卒業時の担任の先生の様子、この一年の級友の消息などが輪島から告げられ、ついで出席者が順に近況を報告し始めると、重也は次第に気持ちの冷めていくのを覚えた。小学校の運動場を思わせる伸びやかな温^{ぬく}もりに身を浸すつもりで出かけて来たにもかかわらず、妻を亡くした一人暮らしの話や抱えている病気の苦労などを聞くうちに^⑩益々^{ますます}居心地の悪さが募って来る。去年まではこんな会ではなかった筈^{はず}だと思ふのに、その一年前の様子がうまく呼び起せない。クラスで駆けつこの一番早かった級友が軽い脳梗塞^{脳梗塞}を起し、頭の検査をしたと告げた時だけ重也は低いテーブルに身を乗り出した。小さな異常がみつかった他にも満天の星の如く点々が脳に散らばっていたという。その星というのは何だい、と重也は思わず聞き糺^{ただ}した。どうも血栓^{血栓}みたいだよ。そっちの方はでも年齢相応のものらしくてね、と六年間を通じてリレー選手だった男が医学の知識にはあまり自信なさそうに答えた。

二時間ほどの会が終つて御開き^{おひら}となった時、畳の上に長く坐^{すわ}っていたためにすぐには伸ばせぬ足と腰を^{いたわ}りながらようやく立ち上^{あが}った重也は輪島に呼び止められた。入院した大浜のことで君には知らせておきたいことがある、と言われた彼は皆より一足遅れて部屋を出た。狭い濡れ縁^{ぬれえん}の形をした踏み板の下に二足の靴が残っていた。一方は紐^{ひも}のついた重そうな黒靴で、輪島が躊躇^{ためら}いもなく足を入れた。もう一方の軽そうなスリッポンを突掛け、輪島から渡された靴篋^{くつべら}で踵^{かかと}を滑り込ませた時、異様な窮屈さに足が締め

つけられた。

「^⑪靴が違^う」

悲鳴に似た声が重也の咽喉^{のど}から洩^もれた。

「間違えたのかな、先に出た誰かが」

輪島の言葉が長閑^{のどか}な風のように吹き過ぎる。

「靴が違^うよ」

慌てて脱いだ靴を重也は気味悪い生き物でも見下^{みおろ}すように眺めやった。自分の足に快く馴染^{なじ}んだ黒靴が新宿の街を勝手に歩いて行くような気がした。履く足は見えず、ただ黒い靴だけが舗石の上を軽々と遠ざかつて行く――。

俺ではないよ。俺が間違えたのではないよ。重也は口の中で幾子に繰り返し訴えた。輪島が脇で何か言っていたが、その言葉は重也の耳に届かなかった。

【注】

*暗剣殺……………最凶の方角。転じて、会っては都合の悪い人がいる方向、災難に遭う方向のこと。

*オープンシャツ……………ネクタイを結ばない襟元があいた開放的なシャツ。開襟シャツ。

*アスコットタイ……………結んだ時にスカーフのように見える、幅の広いネクタイ。

*濡れ縁……………雨戸の外に張り出した縁側。

*スリッポン……………ひもや留め具がなく、着脱の容易な靴。スリッポン。

【問1】 ㉠㉡のカタカナを漢字に改めなさい（楷書で、丁寧を書くこと）。

- ㉠ アツデ ㉡ ユルめて ㉢ ヒナシ ㉣ フキン ㉤ ツヤ

【問2】 — ①「有無をいわせぬ」 ③「たじろいだ」 ⑥「鷹揚おうえうに」とありますが、(1)「有無をいわせず」(2)「たじろぐ」

(3)「鷹揚」とはどういうことですか。次の中から適当なものを選び、それぞれ(イ)～(ヘ)の符号で答えなさい。

- (イ) 人を見下したようなえらそうな態度を取ること。
(ロ) 後先を考えずに度を超えて行うこと。
(ハ) ゆったりと振る舞うこと。余裕があつて目先の小事にこだわらないこと。
(ニ) 相手の承知不承知にかかわらず無理矢理にすること。
(ホ) 思い切りがつかなくて行動に移れず、しようかしまいか迷うこと。
(ヘ) 圧倒されてひるむこと。しりごみすること。

【問3】 A ㉠ C ㉡ に当てはまる語の組み合わせとして適当なものを選び、(イ)～(ヘ)の符号で答えなさい。

- (イ) A ㉠ ひっそりと B ㉡ ありありと C ㉢ のろのろと
(ロ) A ㉠ ありありと B ㉡ ひっそりと C ㉢ のろのろと
(ハ) A ㉠ のろのろと B ㉡ ありありと C ㉢ ひっそりと
(ニ) A ㉠ ひっそりと B ㉡ のろのろと C ㉢ ありありと
(ホ) A ㉠ ありありと B ㉡ のろのろと C ㉢ ひっそりと
(ヘ) A ㉠ のろのろと B ㉡ ひっそりと C ㉢ ありありと

【問4】

——②「ひと繋^{つな}りの世界の切れ目との出会い」について次の設問に答えなさい。

(A) この時の重也の思いや考えはどのようなものであったと考えられますか。次の説明文の(1)(2)(4)より適当なものを選び、それぞれ(イ)～(リ)の符号で答えなさい。

飲み物が入ったコップを落としてしまうこと自体は、

- (1) (イ) 事前に予測できる範囲のこと
(ロ) 自分で統制できないでこと
(ハ) 誰にとってもありふれたこと
- であって、各段、気にするようなこともない。

しかし現在の重也はある予感をもってこの事態を受け止めている。「食卓での失敗の瞬間」が、

- (2) (ニ) 過去から呼び戻されたかのように見えるとき
(ホ) 他者の視点から見ているかのように映るとき
(ヘ) 自らの死を予見したかのように思われるとき
- 、「突然時が停止」し、そこから

「何か巨大なもの」が「ゆっくりと動き出そうとする気配」が感じられる。それは、「3」に似ていて、

- (4) (ト) 確かな手応えのある世界が世界ごと失われていくように
(チ) 老いた事実を今すぐに受け入れなければならないように
(リ) 天動説がくつがえされて地動説へと認識が変わるように

重也には感じられたのである。

(B) (3) には「ひと繋りの世界の切れ目との出会い」と同様の意味を示す表現が入ります。適当な語句を

—— ②より前の部分から21字（句読点を含みます）で見出し、始めの5字を記しなさい。

【問5】

—— ④「変ですよ」とありますが、この時、幾子は何を心配しているのですか。次の中から最も適当なものを選び、

(イ) (ホ) の符号で答えなさい。

(イ) 指が滑って物を落としてしまうのが今日だけに限ったことではない重也は、注意力が散漫になっているのではないかと、ということ。

(ロ) 昨夜、戸締りをお願いしたはずの玄関の鍵が開いたままだったことに、果たして重也は気づいていないのではないかと、ということ。

(ハ) 別のことをしているうちに、その前に取り組んでいたことがなおざりになる重也に、何か心配事でもあるのではないかと、ということ。

(ニ) このところあまりにも物忘れの激しい重也の身体の中で、本人でも気づきようなない病が進行しているのではないかと、ということ。

(ホ) 以前の重也からは想像もつかないほど、性格や人格が変わってしまったことに本人が気づいていないのではないかと、ということ。

【問6】

——⑤「立て続けに幾子の指摘が始まった」とありますが、この指摘を重也はどのように受け止めましたか。次の中から最も適当なものを選び、(イ) (ホ) の符号で答えなさい。

(イ) 幾子の指摘は重也には驚きの連続で、自分のことのように思えなかった。しかしそれよりも、自分の記憶があやふやになっていくに従って、妻の幾子に余計な心配と苦勞をかけてしまうことに罪悪感を覚えた。

(ロ) 幾子の指摘は、重也の身に覚えがないことの方が多かった。しかしそれよりも、それらの出来事に口をはさまずに黙っていた妻の態度を重也は恐ろしく思い、身体がはてっていつそう息苦しくなるのを感じた。

(ハ) 幾子の指摘によって、重也は自分では抑えられない病の進行に気づき不安を覚えた。しかしそれよりも、夫の病の進行を知りつつ、そばでじっと見つめていただけた妻の態度に不信任感を抱き、恐ろしく感じた。

(ニ) 幾子の指摘は、重也が何度も聞かされていることばかりだった。しかしそれよりも、すでに終わつたはずのことを、今になって持ち出して自分を責め続ける妻の態度に怒りを覚え、身体が熱くなるのを感じた。

(ホ) 幾子の指摘のひとつひとつについて、重也はその時のことをまざまざと思い出した。しかしそれよりも、今度こそ次に取り返しのできないことが起こり、自分自身が終わりを迎えてしまふような予感を覚えた。

【問7】

——⑦「こういう日があるんだ」とありますが、この時の重也の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、(イ) (ホ) の符号で答えなさい。

(イ) 小学校の同級生たちと会う約束がある日に、たまたま歯医者者の予約が重なってしまったので、これからはカレンダーに自分の予定を書き込んでおこうと反省している。

(ロ) どこで記憶が狂ったか、歯医者者の診察券の裏面に間違いなく今日の日付が記入してある事実は今さらながら驚きつつ、世話役の大浜が来られないことを心配している。

【問8】

(ハ) 災難というのは重ねてやってくるものなので、今回のようなことが起こるのはやむを得ず、嵐が過ぎ去るのを待つようにひたすら我慢するしかないのだと思っている。

(ニ) カレンダーの数字が自分の思惑とは別に動き回っているかのような錯覚にとらわれ、自分の記憶の頼りなさをふがいなく思いつつ、得体のしれない不安を感じている。

(ホ) 今日が小学校の同級生たちと集う予定の金曜日であることを、他人からの指摘を受けるまで気づかないという事態に、何となく当事者としての意識を持ってないでいる。

——⑧「いつになく慰める響きの声が妻から寄せられるのに触れると俄かに重也は反撥を覚えた」とありますが、この時の幾子と重也の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、(イ)～(ホ)の符号で答えなさい。

(イ) 幾子は、家の中での物忘れにとどまらず、よその人にも影響が出てしまうことを心配しているが、重也はこの状況はあくまで偶発的なもので、妻の心配をよけいなお世話だと思っている。

(ロ) 幾子は、歯医者予約というものが取りづらいことは自明であり、すぐ別の日とはいかないことを知っているが、重也は予約の変更に柔軟に対応してもらえると高くくくっている。

(ハ) 幾子は、かなり前からもの覚えが悪かった夫を心配して声をかけ続けてきたが、重也は自分の記憶違いは何か気にかけるほどの大事ではなく、妻の声に憐みを感じ取っていらだっている。

(ニ) 幾子は、夫の今日の予定を把握しきれなかったことを反省しているが、重也は自分の用事が同じ日に並立してしまった状況を抜け出す方法が何か探さなければとあせっている。

(ホ) 幾子は、夫が古い友人に会う機会などめったにないので送り出してあげたいが、重也はどちらも気乗りしない用件なのでこうなってしまったのは自分の認識不足だったと思い返している。

【問9】

—— ⑨ 「妻の言葉をやり過ぐすようにして彼はドアを押した」とありますが、この時の重也の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、(イ) (ホ) の符号で答えなさい。

(イ) 妻が言う通り自分の様子が普段と違っていることは確かであり、不測の事態を繰り返さないよう何とかしなければと思案している。

(ロ) 妻が自分を気遣ってくれていることは理解しながらも、自分の脳の状態に不安を覚えてしまう現状を認めたくはないと思っている。

(ハ) 妻の言葉に自分へのさげすみの響きがあることで傷つき、この場から逃げ出したいほど悔しく、いきどおりを感じている。

(ニ) 妻の小言は毎度のことだとあきらめつつも、長く夫婦を続けてきてもわかりあえないことはあるのだと自分になぐさめている。

(ホ) 妻が言うことに一理あることは認めているが、今日だけはどうしても小学校時代の友人との約束を優先すべきなのだと思っている。

【問10】

――⑩「益々居心地の悪さが募^{ます}って来る」とありますが、その理由を説明したものとして最も適当なものを次の中から

選び、(イ)～(ホ)の符号で答えなさい。

(イ) 自分にとって落ち着くことのできる仲間^{いらいだ}に囲まれることで老齢の不安から解き放たれたと思っていたのに、妻が心配していた通りの展開となってしまうことに、苛^{いらだ}立ちと後悔を感じざるを得なかったから。

(ロ) かつての同級生たちの近況報告が、近い将来の自分の姿と重ねられることによって、小学校時代を共に過ごすことを通じて自分たちが築^きいてきたはずの美しい思い出が一方的な形で汚^くされているように感じたから。

(ハ) 旧友^{ふるとも}と思い出話を交^まわすことで自身が抱える身体への不安を少しでも紛^{まぎ}らわせようと期待していたのに、結局、年を重ねていくことで実感される苦^{くる}労ばかりを聞かされて、年齢には到底、抗^{あらが}えないように感じたから。

(ニ) ただでさえ、現在親交を結んでいない人々と同時に居合わせるのは神経を使うのに、飛び交う会話のひとつひとつに救^{すけ}いがなく、お互いが重ねてきた年月の価値を、自分たちの手で損^こなっているように思えたから。

(ホ) 青春時代の美しい時間を束の間思^{おも}い出すことを通じて、この世に生まれてきたことを喜びたいと思^{おも}って馳^はせ参^まじたはずなのに、その時間の美^{うつく}しさが色あせてしまったことを突きつけられているような気がしたから。

【問11】

—— ⑪「靴が違う」について次の設問に答えなさい。

(A) この時の重也の思いや考えはどのようなものであったと考えられますか。次の説明文の(1)と(3)と(7)より適当なものを選び、それぞれ(イ)～(ソ)の符号で答えなさい。

輪島に呼び止められ、皆より一足遅れて部屋を出た重也だったが、履いた靴が自分のものではなかった。重也はすぐさま、悲鳴に似た声をあげて慌てて靴を脱いでいる。

ここで、重也の今日の服装に改めて注目してみよう。今日の重也は、

- (1) (イ) 級友との久しぶりの再会に備えた正装で身なりを調えていた
(ロ) 機能性と保温性を兼ね備えたいつもと同じ普段着を着ていた

ようである。

とすれば、最近新調したらしい「黒い靴」もそれに見合った代物であった可能性が高い。少なくともそれは、

- 「(2)」

ではなかっただろう。つまり重也は、足を通す前にそれが自分の靴ではないことに気づけたはずなのである。ここまで重也は、自分に降り注いだ災厄はすべて、

- (3) (二) 自分とは直接関係のないできごとの連鎖
(ホ) 加齢による抗え^{あらが}ない運動する能力の低下
(ヘ) 脳梗塞の前兆とおぼしき初期症状の数々

、として認識しようとしていた。

しかし、あらためて振り返ってみれば、

- (4) (ト) 「例年顔を揃^{そろ}える男達^{たち}はほぼ見憶えがあった」
(チ) 「数人いる女性たちは名前もわからない者の方が多かった」
(リ) 「星塚の姿は見えなかった」

ことや、

(ヌ) 「去年まではこんな会ではなかった」

ことを踏まえると、実際に靴を履いてみるその時まで、

(ル) 「一年前の様子がうまく呼び起せない」

(ヲ) 「二時間ほどの会が終って御開きおひらとなった」

重也が事態に気がつけないのも致し方なかったと考えられる。このあと、「ただ黒い靴だけが舗石の上を軽々と遠ざかって行く」ような錯覚に襲われたのも、

(ワ) 自分の身体感覚を制御できなくなりつつあること

、を証し立てている。

(カ) 履き違えた本人が自分のすぐ側にいたということ

(ヨ) 意志だけでは乗り越えられない壁が存在すること

それでも最後、口の中で「俺ではないよ。俺が間違えたのではないよ。」と重也が繰り返し訴えたのは、

(タ) 自分自身に起きている異変をどうしても自分のものとして受け入れがたい

からであって、

(レ) 妻の幾子が予言した通りに自分の病が進行していることをもはや疑えない

(ソ) 先ほど耳にした級友と同じような満天の星が見えるようになってきている

それゆえに、「輪島が脇で何か言っていたが、その言葉は重也の耳に届かなかった」のである。重也はここでも「ひと繋りの世界との切れ目」に出会っているとと言える。

(B)

(2)

に入る適当な語句を本文中から10字以内で見出し、解答欄に記しなさい。

Ⅱ

次の文章は、未来のジャーナリストに向けたスピーチをもとに書かれたものです。文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

本来このページには大問Ⅱの問題文が掲載されていましたが、二〇二三年度の入試問題につきましては著作権処理の関係上、掲載することができません。掲載されていた問題文の該当箇所につきましては次の書籍を参考にしてください。

レベッカ・ソルニット『それを、真の名で呼ぶならば』岩波書店、二〇二〇年一月、一九五ページ一五行目から二〇五ページ二二行目

【注】

*ハリケーン……二〇〇五年八月末にアメリカ南東部を直撃した、ハリケーン・カトリーナ。

*ボルチモア……二〇一五年四月、刃物を持っていた黒人青年が警察から受けた暴行で死亡した。この出来事を受けて抗議デモが拡大、ボルチモアで激しい衝突が起きた。

【問1】

① 「二〇〇五年、ニューオリンズは三重の災害に遭いました」とありますが、このことに関する次の説明文の
 a 〃 d にそれぞれ該当する語を (イ) 〃 (ヌ)の中から選び、符号で答えなさい。

筆者は、「カトリーナ」と名付けられたハリケーンがニューオリンズに「三重の災害」をもたらした、ということを指摘しています。「三重の災害」とはどのようなものでしょうか。

第一の「災害」として、多くの建物が吹き飛ばされたり市の大部分が水没したりといった、ハリケーンそのものもたらした被害が挙げられます。また第二の「災害」として、インフラの不備をはじめとする政府・自治体による長年の

a 〃 がもたらした被害も挙げられます。さらに第三の「災害」としては、決まりきったイメージに頼った
 b 〃 がもたらした被害があります。

筆者からすれば、異なる三つの水準の被害をもたらしたカトリーナは、第一の「災害」に見られるような c 〃 災害としての側面と同じかそれ以上に、第二・第三の「災害」に見られるような d 〃 的な災害という側面が看過できないのです。

- | | | | | | | | | | |
|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|
| (イ) | 医療 | (ロ) | 偶然 | (ハ) | 経済 | (ニ) | 自然 | (ホ) | 失策 |
| (ヘ) | 人為 | (ト) | 必然 | (チ) | 貧困 | (リ) | 報道 | (ヌ) | 劣悪 |

【問2】

——②「恐ろしい犯罪」とありますが、次の中から最も適当なものを選び、(イ) (ホ)の符号で答えなさい。

- (イ) 明確な動機を持っていないのに犯罪に手を染めている、ということ。
- (ロ) きわめて狡猾こつかつな手口を用いて暴力的な行為を働いている、ということ。
- (ハ) 同じ街に住む市民でありながら互いに犯罪を容認している、ということ。
- (ニ) 被害者であるはずの人がさらに弱い立場の人を傷つけている、ということ。
- (ホ) 社会的に強い立場の者が弱い者に対して犯罪をおこなっている、ということ。

【問3】

——③「公式バージョンのストーリーを裏返したり、ひっくり返したりして、実際にブレイクしたのだ」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、(イ) (ホ)の符号で答えなさい。

- (イ) 政府が示す方針に異論を唱えて反政府運動をおこなった、ということ。
- (ロ) 主流メディアが報じていることの事実誤認を明らかにした、ということ。
- (ハ) 実際に起きた出来事を物語仕立てにしてわかりやすく伝えた、ということ。
- (ニ) メディアが流す根拠の乏しい情報の裏取りをおこない補足した、ということ。
- (ホ) あまり報じられる機会のない災害時の行動について記事を書いた、ということ。

【問4】

——④「共同作業」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、(イ)～(ホ)の符号で答えなさい。

(イ) ストーリーをブレイクするためには、個人の力ばかりに頼るのではなく、主流メディアとうまく連携を取ることが大事である、ということ。

(ロ) 新しいストーリーの浸透には、その出来事を体験した当事者のみならず、周囲に伝えていこうとする第三者の力も重要である、ということ。

(ハ) ストーリーをブレイクするにあたっては、その物語や神話を築き上げてきた先人たちに対する畏敬の気持ちを抱くべきである、ということ。

(ニ) 新しいストーリーの形成には、メディアによる報道や伝達以上に、さまざまな人々による集団的な想像力の働きが求められる、ということ。

(ホ) 新しいストーリーを無視した人たちも、そのストーリーを見聞きしていたという点で、ストーリーのブレイクに携わっている、ということ。

【問5】

⑤「客観的になることはできませんが、公正であることはできます」とありますが、このことに関する次の説明文の
a ～ d にそれぞれ該当する語句を（イ）～（ハ）の中から選び、符号で答えなさい。

ベン・バグデイキアンというジャーナリストの「客観的になることはできませんが、公正であることはできます」という言葉の背後にあるのは、a などというものは存在しない、という認識です。例えば、ジャーナリストが何か伝えようとするとき、その人が何を価値あるものとして考えているかということには、すでにその人の
b が含まれていると言えます。

このように考えると、現状に対してつとめて「客観的」であろうとすること自体、主流メディアの報道に対する
c を示すことにつながりかねません。だからこそ筆者は、ストーリーをブレイクすることの重要性を説くのです。だとすれば、ジャーナリストに求められるのは、公正な社会の実現に向けた d なのだと言えるかもしれません。

- | | |
|------------|------------|
| （イ） 実質的な賛意 | （ロ） 主体的な関係 |
| （二） 積極的な介入 | （ホ） 中立的な立場 |
| | （ハ） 政治的な判断 |
| | （ヘ） 挑発的な態度 |

【問6】

——⑥「物書きの仕事は、ほかの誰かが建てた家の窓から外を眺めることなく、外に出て家の枠組に疑問を投げかけることです」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、(イ)～(ホ)の符号で答えなさい。

(イ) 物書きは、既存の物の見方にしたがうのではなく、その見方の裏側に何が存在するのかということにこそ注目すべきだ、ということ。

(ロ) 物書きは、身近な問題ばかり取り上げるのではなく、自分が生きてきた世界の外側にある問題にこそ目を向けるべきだ、ということ。

(ハ) 物書きは、誰かが見つけてきた情報に頼るだけではなく、いまだ誰も知らない事実を発見することにこそ注力すべきだ、ということ。

(ニ) 物書きは、主流メディアが流す情報を鵜呑みにするのではなく、その情報をめぐる真偽の確認にこそ力を費やすべきだ、ということ。

(ホ) 物書きは、あらかじめ他の誰かに用意された問題をただ解くのではなく、自分自身が設定した課題にこそ答えるべきだ、ということ。

【問7】

——⑦「歴史を知る必要があるのです」とありますが、ここでの「歴史を知る」に当てはまらないものはどれですか。
次の中から最も適当なものを選び、(イ)～(ホ)の符号で答えなさい。

- (イ) ある事件に対して、そういった事件がどのくらいの頻度で起こっているのかを知ること。
- (ロ) ある事件に対して、その裏で誰が苦しんでいて誰が得しているのかということを知ること。
- (ハ) ある事件が起こったとき、それがどのような手順でおこなわれたのかという詳細を知ること。
- (ニ) ある事件に対して、それがどのようなかたちで人々の認識の型に押し込まれるのかを知ること。
- (ホ) ある事件が起こったとき、かつてそういった事件がどのように正当化されてきたのかを知ること。

【問8】

——⑧「主流メディアには、それほど右翼あるいは左翼のバイアスがあるわけではなく、現状維持のバイアスがあるのだと思います」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、(イ)～(ホ)の符号で答えなさい。

- (イ) 主流メディアは政権交代には興味がなく、もっぱら現在の政治体制の維持を望んでいる可能性がある、ということ。
- (ロ) 主流メディアは政治的偏向があるというよりも、大きな変化を受け入れない傾向があるのではないか、ということ。
- (ハ) 主流メディアには政治的な意見こそ見られないものの、自らの権威を高めようとする態度が見られる、ということ。
- (ニ) 主流メディアが政治に対して無関心なのは、単に自分たちの社会的な立場を守りたいからではないか、ということ。
- (ホ) 主流メディアが政治的に中立の姿勢を示そうとするのは、未来に対する期待が低いことの現れだろう、ということ。

【問9】

A

には共通する漢字1字が入ります。当てはまる漢字1字を書きなさい。

⑨「ストーリーを作る者として、ブレイクする者として、わたしたちはとても強力な存在なのです」とありますが、これに関する次の説明文を読んで、(1)～(6)について、適当なものをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

この社会にはさまざまなストーリーがあります。そのさまざまなストーリーのうち、まず筆者は主流メディアによって作られるストーリーについて批判的に言及します。というのも筆者によれば、主流メディアというのは、おなじみのストーリーを拠りどころにしているため、

- (1) (イ) 社会に対する人々の興味を失わせてしまう傾向
(ロ) すでに定着している偏見をさらに強化する傾向
(ハ) 世間に知られている事実ばかりを報道する傾向
- を持つからです。

加えて、筆者が指摘するところによれば、主流メディアが報じるこれらのストーリーはしばしば、

- (2) (ニ) 公正な社会に対して大規模な変化をもたらします
(ホ) あえて多数派を失望させるようなことを言います
(ヘ) 特定の人に対する不当な抑圧をとまっています
- 。

一方、このような主流メディアによるものとは異なるストーリーも存在します。それは言うなれば、

- (3) (ト) 社会の周縁に追いやられたストーリー
(チ) データの断片を寄せ集めたストーリー
(リ) 権威ある人々に認められたストーリー
- といったものです。

筆者によれば、このような見過ごされがちなストーリーは、だからこそ

(4) (ヌ) 主流メディアの足りない部分を補完するもの
 (ル) 主流メディアの後継となる無視できないもの
 (ヲ) 主流メディアのストーリーに對抗しうるもの
 として重要なのです。

筆者がジャーナリストを「とても強力な存在」だと考えるのは、筆者がジャーナリストに対して、ストーリーを「作る者」「ブレイクする者」というふたつの側面を見出し^{みいだ}ているからです。つまりジャーナリストとは、ストーリーを「作る者」、すなわち、

(5) (ワ) この社会における制度や体制を作り上げる存在
 (カ) この社会に生きる少数者の声を掘り起こす存在
 (ヨ) この社会の事件をいち早く世の中に伝える存在
 であると同時に、

ストーリーを「ブレイクする者」すなわち、

(6) (タ) この社会における支配的な考えを解体する存在
 (レ) この社会の成り立ちにまつわる謎を解読する存在
 (ソ) この社会の人々が抱く苦悩そのものを解消する存在
 にもなりうるのです。

筆者にとって「ブレイク・ザ・ストーリー」という言葉は、そのような「奥深い響き」を持ったものなのです。

【出典】

Ⅰ 黒井千次「昼の星」(『枝の家』文藝春秋、二〇二二年所収) 一四〇頁～一五〇頁

Ⅱ レベッカ・ソルニット、渡辺由佳里「訳」『それを、真の名で呼ぶならば』(岩波書店、二〇二〇年) 一九五頁～二〇五頁

